

マルサス對リカアドオの價值論爭

大野純一

一、序 言

英國正統派經濟學の二大峰・マルサスとリカアドオとは學問上に於ては共にアダム・スミスより發する許りではなく、私的生活に於ても亦互に永年親交を續けたにも拘らず、その學風・學說に於て大いに趣を異にしたのである。リカアドオは抽象を好み純理を重んじ概念的な推論を行つたのに對して、マルサスは經驗を重んじ事實を蒐集し以て實證的研究の途を常に辿つたのである¹⁾。従つて又當時世論を沸騰せしめたところの貨幣、恐慌、關稅等の諸問題に關して互に兩者は意見を異にし之等について數多くの論爭を闘つたのであつた。

今私が茲に問題とするのはそれらの中經濟價值に關する兩雄間の論爭である。この價值論爭のテーマは二つあつた、即ちその一は價值の本質、原因に就てであり、二は既に存在する價值の尺度に關するものである。尤も、リカアドオの所論の主眼は前者でありマルサスの所論の多くの部分は後者を取扱つてゐるが爲め、學者の

1) リカアドオ自身1815年10月7日附のマルサス宛書翰の中で次のやうに言つてゐる。

If I am too theoretical (which I really believe is the case), you I think are too practical. There are so many combinations and so many operating causes in Political Economy that there is great danger in appealing to experience

中にはこの二つを分ち且つ兩説を對立せしめることに異議をなす者もあるが、マルサス自身 *Principles of Political Economy* 第二版の中で「一貨物に投ぜられたる労働は其價值の主なる原因であるが其尺度ではない。一貨物が支配する労働は其價值の原因たらぬけれども其尺度である。」(八十三頁)と言つており、又リカードオがマルサスへの手紙の中で精確な價值尺度を否定しつつも、尙投下労働を以て比較的妥當なる價值尺度なりと主張するに徴すれば、問題を二つに分けて各々について所論を對立せしめることは決して誤りではないであらう。

彼等の師・アダム・スミスは、諸財貨の交換比率を決定するものは初期未開の社會に於ては財貨の獲得に費されたる労働量であつたが、資本の蓄積、土地の占有が行はれる社會に於ては賃銀、利潤及び地代が *The three original sources of…… all exchange value* であると説き¹⁾、購買せられ若しくは支配せられる労働量を以て交換價值測定の尺度なりと主張したのである。即ち、彼は價值の原因に關しては投下労働説と生産費説の二元の價值法則を建て、その尺度については支配労働説を稱へたのである。然るに、リカードオは投下労働を以て凡ゆる社會を通じての價值要因なりと主張する許りではなく、それは又比較的妥當な價值尺度でもあると解したのである。之に對してマルサスは所謂需要供給説によつて價值の本質を説き、價值の尺度に就ては當初は穀物と労働との中項を、後には支配労働説を持ち來つて、リカードオの投下労働説に突撃したのである。

價值に關するこれら二つの論争の中價值の尺度に關するそれは、多くの人々がマルサス對リカードオの價值

in favour of a particular doctrine, unless we are sure that all the causes of variation are seen and their effects duly estimated. (Letters of D. Ricardo to T. R. Malthus. Ed. by James Bonar. 1887. p. 96.)

1) A. Smith. *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*. Ed. by E. Cannan. 1904. p. 54

論争として直ちに想起するところのものであり、又それは事實彼等が主力を注いで争つた問題でもある。併し乍ら、この問題はかゝるものとして獨立に觀察するならば學問的興味の極く少ないものであつて、それは今一つの問題、本質又は原因論に關聯せしめられて始めて學問的重要さを有するのである。

従つて英國經濟學に於てこの問題がそれ自身重要問題として論議せられたのは一八三六年に出版されたるマルサスの Principles 第二版を最後とするのである。然るに、價值の本質乃至原因に關する論争に於けるマルサスの所説は英國經濟學上に於ける労働價值説排除の最初の企としての大なる意義を有する許りではなく、それはまた J. S. Mill, Cairnes, Marshall 等に影響し需要供給法則の發展に貢獻するところが大であつたのである。¹⁾ 故に、私は主として價值の本質に關する彼等の論争を紹介、批判し、所謂價值尺度に關する論争は最後に輕く觸れることにしやう。

二、リカアドオの價值論と之に對するマルサスの批判

リカアドオはスミスに倣つて價值を使用價值と交換價值とに分つたのであるが、前者についてはたゞそれが後者の前提なりと説くのみでは以上突込んで研究をしはしなかつた。従つて、彼の價值論は交換價值を中心とするのである。²⁾

然らば、リカアドオは一體價值論に如何なる任務を與へたであらうか。彼はそれによつて直接市場價

- 1) A. C. Whitaker. History and Criticism of the Labor Theory of Value in English Political Economy. 1904. p. 80.
- 2) 小泉信三譯 經濟學及課稅之原理 (岩波文庫) 七頁參照
D. Ricardo, Principles of Political Economy and Taxation. 1st ed. 1817. 2nd ed. 1819. 3rd ed. 1821.

以下の引用は主として小泉信三譯經濟學及課稅之原理 (岩波文庫) に據り、第一第二版の比較の必要ある場合には同氏譯、リカアドオ經濟及租稅原論 (經濟學古典叢書) を參照することとする。

格の法則を發見せんとしたのでなく自然價格の法則を見出さんとしたのである。彼によれば、市場價格は市場に於ける時々の偶然的な原因によつて定まるものであつて、之に對しては一般的法則を樹立することは出来ない、併し乍ら、市場價格なるものは自由競争の存する限り自然價格に落着かんとする傾向を有するものであるから、價值論によつて自然價格の構成法則が發見されるならば經濟學の中心問題たる價格論は解決せられると考へたのである。而して、彼にあつてはかの交換價值が所謂自然價格に相當するのである¹⁾。

扱て、然らば、彼は交換價值の源泉即ち原因を何處に求めたであらうか。彼によれば、既に利用あるものとすれば、それは二ツの源泉から生ずるのである、即ち稀少性と投下勞働量とがそれである。彼は貨物を任意不可増のものと任意可増のものに分ち、前者の價值は投下勞働量には關係なく獲得者の資力と嗜慾とによつて決定せられ、後者の價值はその生産に費されたる勞働量に依存すると解したのである。併し乍ら、市場の貨物の大部分は任意可増財なるが故に、「貨物を論じ、其交換價值及び其相對價格を支配する諸法則を論ずるに當つては、吾人は常に人間の努力によつて其數量を増し得べく、且つその生産上に競争の制限なく作用するが如き貨物のみを意味するものである、」²⁾従つて、「社會發達の初期に於ては、是等諸貨物の交換價值、即ち交換上一貨物の幾許が他の貨物に對して與へらる可きかを決定する規則は、殆ど専らその各個に費されたる比較的勞働量に由て定まるものである、」³⁾と主張して差支ないといふのである。但し、彼に於ける費用、即ち投下勞働量は單に直接その財の生産に投ぜられた勞働量を指すのではなく、生産手段の生産に投ぜられた勞働量をも含み、

1) 前掲譯、六九——七三頁
 2) 前掲譯、八——九頁
 3) 前掲譯、一九——二五頁

而かも最も不利なる事情の下に生産された同種の財の投下労働量を意味するのである。¹⁾

尙、彼は、後にマルクスが「社会的に必要な労働時間」を持ち來ることによつて解決せんとしたところの種の種々なる品質の労働量の比較の困難を意識しなかつた譯ではないが、彼は次の二つの理由からこの問題を以て重要ならざるものと考へたのである。即ち、その一は異なる労働の等級は市場の競争に由て大體の用を辨する程度には充分正確に定められるといふことであり、他は貨物の交換價值、相對價值の變動を測定するには異種の労働を直接相互に比較する必要はない、たゞ或場合に於ける或種の労働と別の場合に於ける同種の労働とを比較すればそれによつて價值變動の原因を探り得るといふのがそれである。

以上はリカアドオ價值論の根本である、而して、こゝまでの論述はスミス思想と差したる相違を有してはゐない。併し乍ら、既述の如く、スミスは投下労働説を以て「資本の蓄積並に土地の私有に先き立つ初期末開の社會状態²⁾」にのみ妥當するものとし、文明社會に對しては投下労働説を去つて生産費説をとつたのであつた。然るに、リカアドオはかゝる社會に於ても賃銀、利潤並に地代が價值を決定するのではなく、反對に投下労働量によつて生じた價值が分割せられて賃銀、利潤並に地代となるのであると考へるのである。されば曰く「彼の價格を支配する品質の土地を耕す農業家や、諸商品を製造する製造家」やの「貨物の全價值は單に二部分に分割されるのみである。一は資本の利潤をなし、一は労働の賃銀を成すのである。」³⁾と。又地代が價值に對して無關係なることに關して曰く「穀物の價值は、彼の地代を支拂はぬ土地に於て、若しくは地代を支拂はぬ資本部

- 1) 前掲譯、五三頁
- 2) 竹内謙二譯、國富論上卷(改造文庫)一七九頁
- 3) 小泉信三譯、經濟學及課稅之原理(岩波文庫)九一頁

分を以て生産を行ふ場合の、其生産に投ぜらるゝ労働量に由て左右せらるゝものである。穀物は地代が支拂はれるから高價なのではなくて、穀物が高價だから地代が支拂はれるのである。」と。斯くて彼は經濟發展の兩段階を通じて一貫的に投下労働説を以て價値現象を説明せんとしたのである。が、彼のこの企はどこまでも實現せられたであらうか。否、彼はその所論の進むに従つて大なる難關に逢着しなければならなかつたのである。

然らば、彼がこゝに直面した難關は如何なるものであつたか。文明社會の實狀を見れば、例へば異なる産業に使用せられる固定資本と流動資本との結合の割合が同一でないにも拘らず、尙そこには平均利潤率が支配し同額の資本には同額の利潤が生れて來るのである。この動かす可からざる事實は彼の今迄述べ來つた純粹の労働價値説にとつては解き難い謎の如くに見えるのである、今「假りに二人の人があつて、二つの機械を建造する爲め、各々一百人を一年間雇傭し、更に別の一人があつて、同數の人を穀物耕作に使用するものとすれば、各々同一量の労働に依て生産せらるゝものであるから、年の終りに於て、各個の機械は穀物と其價値を同じうするであらう。一方の機械の所有者は、それを次年に於て、百人の助力を以て羅紗製造に使用し、他の一方の機械の所有者も、亦た、それを同じく百人の助力を以て綿製品の製造に使用し、一方農業家は、引續き舊の如く、百人を穀物の耕作に使用するものと假定せよ。第二年間に於て、彼等は皆な何れも同一量の労働を使用したであらう。併し、毛織物業者及び綿織物業者の生産物と機械との合計は……一百人の労働を二年間使用した結果であるのに、穀物は一年間一百人の労働に依て生産せられたものである、従つて若しも穀物の價値が五〇

○磅ならば、「純粹勞働價值説に従へば、「毛織物業者の機械と羅紗との價值は、當さに一、〇〇〇磅たるべく、又綿織物業者の機械及び綿製品も亦た同じく、穀物の價值の二倍たるべきものである。」「然るに、「實際は平均利潤率が支配するため、「是等のものは、穀物の價值の二倍以上に上るであらう。」¹⁾即ち、平均利潤率の存在は純粹の勞働價值説の實現を妨げるのである。こゝに於て彼は投下勞働説が妥當するのは、「生産上機械を使用せずして勞働のみを使用し、且つ其貨物を市場に齎す迄に凡べて同一時間を要する」場合及び「其價值と耐久力とを同じうする固定資本を使用した」場合に限るとし、²⁾再び勞働價值説の妥當範圍を限定するのである。而して、之等以外の場合に於ては、價值は投下勞働量の増減を俟たず賃銀の變動、換言すれば利潤率の變動に由つても變動することを彼は認めるのである。³⁾この點を彼は一八二〇年五月二日附のマカロック宛書翰の中で左の如く卒直に告白してゐる、曰く「此の問題に就てなし得る最善の思索の結果、私は貨物の相對的價值を動かす原因が二つあることを信ずるものである。第一は貨物を製作する爲めに必要な相對的勞働量、第二は勞働の結果が市場に賣出される迄に經過する時間の長短である。さうして固定資本に關する一切の問題は右の第二の規則の範圍に落ちるものである。」⁴⁾と。

以上は主として Principles の中に展開されたるリカードの價值本質論の概要である。Principles の第一版は一八一七年春公にせられその後二版（一八一九年）三版（一八二一年）と版を重ねたのであるが、こゝに問題とする價值論に關する限り、その間に本質的相違はなかつたのである。たゞ彼は純粹なる勞働價值説の例外

1) 前掲譯、三二頁

2) 前掲譯、二七頁

3) 前掲譯、三三—三八頁

4) Letters of D. Ricardo to J. R. McCulloch 1816—1823.
Ed. by J. H. Hollander. 1895. pp. 131—132.

として第一版に於ては固定資本と流動資本との比率の不同及び固定資本の耐久力の不同の場合を擧げるに止まつたのであるが、第二版以後に於ては更に新に流動資本の廻轉し若しくは投資者の許に復歸する時期の相違の場合を追加してゐるのである。尙、後に問題とするところの「不變の價值尺度に就いて」の一節は第三版に始めて現れたものである¹⁾。

リカードオの Principles が世に出るや學者の間にその價值論に關して賛否の兩論が現れた。James Mill, J. R. McCulloch, Thomas de Quincey 等は彼の意見に同じ Samuel Bailey, J. Robert Torrens 並びに吾が Malchus はその最も有力なる批判者であつた。

マルサスはその著 Principles of Political Economy を一八二〇年に公にしその中でリカードオの價值論に向から反對し、自からは全く異なる立場から價值論を組立てたのである。こゝでは先づ彼のリカードオ批判を検し、彼自身の見解は別に節を改めて紹介することにしよう。

先づ第一にマルサスは「一貨物の交換價值が投下労働量に比例するといふことは、事實上殆んど a contradiction in terms である」といふのである。彼によれば、「交換價值はその言葉の意味するところによれば明かに或他の諸貨物との交換上に於ける價值である。然るに、一貨物にヨリ多くの労働が投下されると同時にそれと交換せられる他の諸貨物にもヨリ多くの労働が投下されたならば、第一の貨物の交換價值はそれに投下された労働に比例しないといふことは自明的である。今、例へば、穀物を生産する爲めの労働が増加すると同時に

1) 小泉信三譯、リカードオ經濟及租稅原論（經濟學古典叢書）六五二—一六七四參照

貨幣その他の貨物を生産するための労働が増加するとすれば、直ちに凡ゆる事物はその生産に投下された労働に比例してその価値を増減するといふことが眞理たり得なくなるのである。この場合には云ふ迄もなく一ブツシエルの穀物は以前より多くの貨幣とも労働とも交換されないであらうにも拘らず、穀物にはヨリ多くの労働が投下されたのである。故に、穀物の交換価値はその生産に費された附加的労働量に比例して變動しなかつたといふことは確かである¹⁾。即ち、マルサスは交換価値なる概念は相對的であるから投下労働の絶對量によつてその大小を決することは出来ないといふのである。

かゝる駁論に對してリカアドオは *Notes on Malthus* に於て次ぎの様に答えてゐる。「予はかゝる場合に穀物、労働並びに貨幣の總てが交換価値を變更したといつてもそこに何等の矛盾を見出し得ない。予はそれ等を砂糖や鐵や靴や織物や銅や等々の価値と比較する、そして以前より多くの總てこれ等のものと交換されるといふことを見出すのである、然るときは、それ等三つの商品は相互には以前と丁度同じ量で交換されるけれどもその価値は騰貴したのである、と言つても何處に不當なことがあるであらうか。砂糖、鐵、靴、織物、銅その他の商品は価値に於て下落したのである、予はかく云ふ必要を絶對的に感ずる者である。若し予がかゝる言辭を用ひるならば、マルサス君は、總てそれらの品物は以前と同様の割合で互に交換されるのに吾人はそれらの価値が下落したと斷定するのかと猛烈な攻撃をしないであらうか。今、鑛山に於て同量の労働で従來と同量の銀を供給することが出来なくなり爲めに銀の価値が二倍になつたと假定せよ。然るときは、従來一封に付き八

1) T. R. Malthus, *Principles of Political Economy considered with a View to their Practical Application*. 1820. p. 86.

志で賣れた茶は今や四志に賣れるであらう。一クォーターに付八〇志で従來賣られた穀物は今や四〇志に賣れるであらう。併し乍ら、茶が稀少となりこの價值ある媒介手段で八志に騰貴し、穀物はその獲得にヨリ多くの労働を要し八〇志に騰貴したと假定すれば、穀物も茶も貨幣もすべて價值を二倍に増加したといふことは依然として眞理ではなからうか。』

之を要するに、マルサスは交換價值なる概念は相對的であるから投下労働の絶對量によつてはその大小を決することは出来ない」と攻撃するに對し、リカアドオは交換價值の要因は投下労働の絶對量ではなく相對量である従つてそこには何等 *contradiction in terms* はないと辯護するのである。確かにこの點はリカアドオの主張が正しいのであつて、マルサスの批判はリカアドオを誤解してゐるのである。リカアドオは明かに *Principles* の第一版に於て『是等諸貨物の交換價值……を決定する規則は、一にその各個に費されたる労働の比較的分量に由て定まるものである。』(筆者圈點)と言つてゐるのである。

併し乍ら、マルサスは『この尺度を常に相對的に解しても、即ち諸貨物の交換價值は各々の費用労働の相對量によつて決定されるとしても、この説が正しく妥當するやうな社會段階は存在しない、』と更に追撃するのである。曰く、『土地が共有たるのみでなく、筋肉労働を助ける爲めに殆んど何等の資本も使用されなかつたやうな極めて初期の時代に於ては、交換は常に各商品が費した労働量に殆んど無關係に行はれたであらう。交換された物品の最大部分は獵獸、魚類、果實等の如き種々の粗生産物であつたであらう、そしてそれらにあつては

1) Notes on Malthus' "Principles of Political Economy" by D. Ricardo. Ed. by J. H. Hollander and T. E. Gregory. 1928. p. 23.

2) 小泉信三譯(經濟學古典叢書)一二頁

労働の効果といふものは常に確かめ難いものであつた。或人は五日間の労働を使用して獲得したものをば、他の幸運な労働者がたゞ二日、或は多分一日の骨折を費して獲得したものと交換したかも知れない。而して、物品のこの交換価値間の不一致は絶えず繰返し起つたであらう。故に、予は「彼の資本の蓄積及び土地占有の二事に先だつ初期蒙昧の社會状態の下に於ては、各種の物を獲得する爲め必要なる労働量間の比例は、是等の物の相互交換に對する規則たり得べき唯一の事情たるものゝ如くである」と考へるアダム・スミスやリカード君に共鳴することは出来ない¹⁾と。斯くて、マルサスは初期の社會では偶然の交換が行はれるが故に投下労働説は適用し得ないといふのである。

併し、彼によれば、『事實に於ては、如何に野蠻な社會段階にあつても、生産費が全く労働にのみ歸せられるやうなことはなかつた²⁾』のである。かゝる時代に於ても固定資本が用ひられたのである。従つて、種々なる貨物の間の固定資本の割合の相違及びその報酬の遅速のためにリカードの説は支持し難いといふのである。何故ならば、彼の考を以てすれば、或貨物の生産に要する固定資本が比較的大なる場合及び資本の回流が比較的遅い場合には「利潤の下落より生ずる価格の下落は、労働の価格の騰貴によつて當然惹き起されるであらう」ところの価格の騰貴を相殺して、尙ほ種々なる程度に餘りがあるであらう。従つて、労働の貨幣價格に於ける騰貴及び利潤率に於ける下落を假定するならば、これ等總ての貨物は種々なる程度に於て當然價格が下落するであらう³⁾として反對の場合には逆の結果が生ずるであらうから。

- 1) Malthus, Principles. 1820. pp. 86—87.
- 2) Malthus, Principles. 1820. p. 90.
- 3) Malthus, Principles. 1820. pp. 90—95

更に、彼は文明の進歩した社會にはこれら二要素の他に新に投下労働説に對する障礙が現はれて來ると見るのである、曰く「固定資本の比例の相違及び流動資本回流の遲速の不同は、發達せる社會に於て、商品の交換價值をばそれに投下された労働量に比例せしめることを妨げる唯一の原因ではない。何等かの程度に商業が行はれてゐる所では、投下された労働及び資本の數量によつて規制されない外國商品が多く工業の原料となつてゐる。文明諸國においては租税は到る所に於て労働に係はることなしに價格に著しい變動を惹き起してゐる。そして更にすべての土地が占有されてゐるところでは地代が支拂はれることは内國産及び内國製の商品の大部分を供給するための他の條件である、」¹⁾と。

要するに、マルサスは、一固定資本の割合の相違、二その報酬の遲速の相違、三外國商品の存在、四租税の影響、五地代の存在の爲めに、諸商品の交換價值は投下労働量に比例するものではないと説くのである。

之に對して、リカードは *Notes on Malthus* で、「予自身固定資本の用ひられる割合、固定資本の耐久性及び商品が市場に賣らされる迄に經過する時間に従つて、商品の價值は生産に要する労働量によつて規制される、といふ一般原理が修正されるといふことを述べたのである。併し乍ら、その生産に必要な労働量以外の如何なる原因も商品の相對的變動に對しては比較的に至極僅かの影響しか與へないといふのが予の意見であつた、又現にそうである、」と答える。²⁾この引用の中ではマルサスの指摘した三、四、五に言及してはゐないが、事實に於て彼は外國商品の存在及び租税の存在が貨物の價值に影響するといふことを認めてゐたといふことは

1) Malthus, Principles. 1820. pp. 95—96.

2) Notes on Malthus. p. 24

彼の Principles から察するに難くないのである。例へば、外國商品に就ては「外國貿易」の章で「一國內に於て諸貨物の相對價值を支配する同じ規則は、二國若しくは其以上の國の間に交換せらるゝ諸貨物の相對價值を支配するものではない、¹⁾」と言ひ、租税に就いては「原生産物の課税によつて諸貨物の價值の上に生ずる影響の極めて多種多様なるべきことは明白である、²⁾」と言つてゐる。但し、地代に關しては「總て同じ價格で賣られる廿塊のパンは各々異なる割合の地代を生ずるであらうが、殘部の價值を規定するものはたゞ地代を生まないとこのものである……³⁾」として、飽く迄もマルサスの考へに反對の態度を表明してゐるのである。

そこで、マルサスは Definitions in Political Economy (一八二七年) の中で斯ふ言ふのである。「事實リカアドオ君自身彼の法則に多くの例外を認めるのであるが、若し吾人が彼の例外に屬する貨物の種類……を吟味するならば、吾々はその數が甚だ多くて寧ろ原則が例外と看做され又例外が原則と看做され得ることを發見するであらう、⁴⁾」と。

以上がリカアドオの勞働價值説を中心としての兩者の論争の要旨である。扱て、然らばこの點についての兩者の取組は如何に審判さる可きであらうか。言ふ迄もなく、私はマルサスに軍配を擧げなければならぬ。マルサスの批判は結局利潤率の平均が行はれるところの資本主義社會に於ては個々の商品は投下勞働量に比例して交換されるものではない、換言すれば純粹の勞働價值説は妥當しないといふことに歸するのであるが、こゝでマルサスが放つたところの批判の矢は實に勞働價值説一般に對して致命的なものであつた。勿論リカアドオ

- 1) 小泉信三譯、(岩波文庫) 一一八頁
- 2) 前掲譯、一五八頁
- 3) Notes on Malthus. p. 18.
- 4) T. R. Malthus, Definitions in Political Economy. 1827. p. 27.

自身それを意識してはゐたが、それは決して彼の解したやうに輕微なものではなかつた。従つて、その後にはける労働價值説の努力の大半は如何にしてこの創痕を癒すか、如何にしてそれを克服するかといふことにあつたのである。この問題に對する一つの解答は Whittaker が指摘したやうに¹⁾既に McCulloch によつて暗示せられ、後に Marx によつて提出せられたのである。即ち、マカロックは一八二五年に The Principles of Political Economy 第一版の中で曰く²⁾

It must also be observed, that though fluctuations in the rate of wages occasion some variation in the exchangeable value of particular commodities, they neither add to nor take from the *total value* of the entire mass of commodities. If they increase the value of those produced by the least durable capitals, they equally diminish the value of those produced by the more durable capitals. Their aggregate value continues, therefore, always the same. And though it may not be strictly true, of a particular commodity, that its exchangeable value is directly as its *real* value, or as the quantity of labour required to produce it and bring it to market, it is most true to affirm this of the mass of commodities taken together. (pp. 312—313)

このマカロックの解決の試みは久しく注意されることなく過ぎたのであるが、マルクス出づるに及んでこの解答は一般に普及するに至つたのである、而してマルクスは、マカロックと同様、一々の商品の價值は價格と離れても尙商品總體の價值と商品の價格總額とは一致するが故に、労働價值法則は効力を失ふものではない、

1) History and Criticism of the Labor Theory of Value. p. 69.
2) J. R. McCulloch, The Principles of Political Economy. 1825.

といふのである。併し乍ら、尙今日に於てもこの問題は「資本論」第一巻に於ける價值法則と同第三巻に於ける生産價格説との間の「矛盾」として學者の間に議論せられつゝあるところのものである。而して、この勞働價值法則のこの重大な缺陷を最初に指摘した者の一人は實にマルサスその人であつたのである。

扱て、然らば、マルサス自身は價值本質乃至原因に關して如何なる考を抱いてゐたであらうか。

三、マルサスの價值論と之に對するリカードの批判

マルサスも亦價值を使用價值と交換價值に分つのであるが¹⁾、後者を更に彼は名目交換價值 *nominal value in exchange* と眞實交換價值 *real value in exchange* とに細分するのである。而して、使用價值を *the intrinsic utility of an object* 名目交換價值を *the value of commodities in the precious metals* 眞實交換價值を *the power of an object to command in exchange the necessaries and conveniences of life, including labour* と定義する²⁾。彼が問題とするのは交換價值である。然るに、彼にあつては價格は名目交換價值であり、名目交換價值は眞實交換價值の單に異なる表現に過ぎないのであるから、結局彼の交換價值の研究は價格の研究に歸するのである。

然らば、この交換價值乃至價格を決定するものは何であらうか。彼の考ふるところによれば、「交換が行はれるところの割合は……それを所有せんとする願望と獲得の難易とに基づく當事者の相對的評價に依存するのである。」然るに、之等個人の願望や能力は當然相違するが故に當初は交換の各比率は各々異なるであらう。併

1) Malthus, Principles. 1820. pp. 51—52

2) Ibid., p. 62

し、時の経過に従つてそこに平均が生じこの一般的な交換比率によつてすべての交換が營まれるやうになるのである。¹⁾ それではこの一般的、平均的な交換比率は何によつて決定せられるであらうか。この點に就て、彼は次の様に考へたのである。「商品の相對的價值、即ちそれらの價格はその供給と對比されたる相對的需要によつて決定されるのである。而して、この法則たるや非常に一般的なるものなるが故に、恐らくは價格變動の如何なる場合と雖もそれを追及していつたならば需要或ひは供給に影響する原因のヨリ以前に於ける變動にまで充分に跡付けし得られないものはないであらう²⁾」と。

屢々、事實需要のない商品は永續的に供給されるものではないから供給は常に需要に等しいのであるといふ需要供給説への批難を聞くのであるが、之に對してマルサスは「需要供給なる用語の或特別の意味に於てはかかる批難は正しいのである。需要の實際の範圍と供給の實際の範圍とは常に互に比例するのである。故に需要の供給に對する割合の變化が價格を變動せしめるといふのはこの意味に於てはあり得ない³⁾」といふ。然らば彼は需要供給なる言葉に如何なる概念内容を與へるのであらうか。

彼は需要を「購買能力を有つた購買意志」、供給を「販賣意志を有つた商品生産⁴⁾」なりとし、需要供給にはその範圍（即ち需給される數量）の他に更にそれらの濃度といふ一つの屬性があると見るのである。而して、需要供給の濃度とは上述の能力及び意志の度合なりと解するのである。従つて、例へば需要濃度とは、彼にあつては、「商品獲得の爲めにヨリ大なる犠牲を拂はんとする能力及び意志⁵⁾」のことである。而して、彼は需要

1) Malthus, Principles. 1820. pp. 53—54.

2) Ibid., p. 64.

3) Ibid., p. 64.

4) Ibid., p. 64.

5) Ibid., p. 66.

供給法則に所謂需要供給なる語は單にその範圍に關聯して用ひらるべきではなくその濃度に關聯して用ひられなければならぬといふのである。「故に」、彼に於ては、「價格を高めるものは、明かに現實の需要の範圍のみでなく、又現實の供給の範圍と比較された現實の需要のみでもなく、需要のヨリ大なる濃度を表現することを必要ならしめるやうな需給關係の變化である、」「そして同様に、價格を低めるものは、現實の供給の範圍のみでなく、又現實の需要と比較された現實の供給の範圍のみでもなく、一時的に豊富な手持品を捌く爲めに、或は生産費減少の結果生じた供給の不斷の超過をば生産物價格を之に應じて低下することなしに防ぐ爲めに、價格の下落を必要ならしめるやうな需要と對比しての供給關係の變化である。」斯くの如く、「もし需給といふ言葉がこゝに述べたやうに理解せられ且つ使用されたならば、一時的な價格にせよ、持続的な價格にせよ、需給によつて決定されないやうな價格はないであらう、そして又如何なる取引、賣買に於ても價格は供給に對する需要の關係に依存するといふことは全く正しいのである。」¹⁾と彼は考へるのである。

それでは價值と生産費とは如何なる關係に在るであらうか。彼に従へば、獨占貨物が生産費と何等の關係も有しないといふこと及び原料品の價格は假令それに投下された労働や資本が同一であつても年々時々市場闘争によつて種々に決定せられるといふことは日常の經驗の示すところであるが、その市場價格が屢々生産費に一致するが爲めに恰かもそれによつて決定されるが如く思はれるところの製造品にあつても、吾々の親しく經驗するところによれば、需給關係の方が時には生産費よりも強く影響する許りではなく、「詳細に觀察すれ

1) Malthus, Principles. 1820. pp. 70-71.

ば、生産費自身が之等の價格に影響するのは、その生産費の支拂が貨物の継続的供給の必要條件をなすがためであることを知るのである¹⁾、即ち生産費變動のために貨物の價格が變動するのはそれが供給を左右するが爲めである¹⁾。「もしかゝる事情がないならば、即ち生産費が上り又は下るにも拘らず、供給の範圍をば偶然の減少若しくは過剰なく全く同一ならしめるならば、價格の變動が生ずるであらうと考ふべき何等の根據もないのである。」

斯く言ふも、マルサスは、それによつて、労働及び生産費が價格に對し最も有力なる影響を與へるといふことを否定せんとするのではない。彼は一商品の生産に投ぜられた勞銀、利潤、地代を支拂ひ得るやうなその商品の價格を必要價格と名づけ之をスミスの自然價格に相當せしめるのであるが、この必要價格を支拂ひ得ることが供給の不可欠な條件なるが故に生産費は間接に商品價格を左右するといふのである²⁾。

併し乍ら、この必要價格の構成要素たる賃銀、利潤及び地代はそれ自身需給關係によつて決定せられるのであるから³⁾、結局に於て「自然價格も必要價格も、市場價格同様に、この原理（筆者註需給法則）によつて規制せられる様に思はれるのである、たゞ異なる點は、前者は供給に對する需要の普通のかつ平均的關係によつて、後者は——それが前者と違ふときには——供給に對する需要の特別な且つ偶然的な關係によつて決定されるといふことである⁴⁾」と彼は結論するのである。

以上はマルサスの價值本質論の大要であるが、リカードは既に Principles 第一版に於てマルサスの思想が

1) Malthus, Principles. 1820. pp. 73—75.

2) Malthus, Principles. 1820. pp. 78—83.

3) Ibid., p. 83.

4) Ibid., pp. 84—85.

その上に築かれてゐるところの需要供給説一般に對して次ぎの様な批評を與へてゐたのである。曰く、「諸貨物の價格は、一に供給の需要に對し、若しくは需要の供給に對する比例に由て定まるといふ見解は、殆ど一の經濟學上の公理となつて居り、而して斯學上多大の誤謬は此に發して居るのである。」勿論、「是は獨占貨物に就いては當つて居り、又爾餘一切の貨物にあつても、限られた期間内の市場價格に就いては、當つてゐる。」が併し乍ら、「競争の下に在つて、其數量の多少とも増加し得る貨物の價格は、結局需要供給の狀態に由らずして、其生産費の増減に由て定まるであらう」と。故に、リカアドオは、獨占價格や一時的市場價格が需給によつて決定せられるといふことには敢てマルサスの説には反對しないのであつて、兩者の意見の相違は競争品の自然價格の決定に關してである。この種の商品に就てはどこまでもマルサスに反對して投下労働説をとなへるのである。

リカアドオは直接マルサスの Principles を批判の對象とした Notes on Malthus の中で「マルサス君が交換價值について今迄に述べた總てのことから判斷すれば、それは人間の欲求とそれらに對する相對的評價とに大いに依存するが如くに見えるのである。かゝることは、若しも國を異にする人々が各自各様の生産物を持ち來つて市場で遭遇し而かも他人の競争に妨げられないものだとするれば、眞理たるであらう。かゝる事情の下では諸商品は市場を訪れる人々の相對的欲求に従つて賣買されるであらう、——併し乍ら、社會の欲求がよく知れ渡つており、かつ衆知の普通利潤を得る丈けの條件で之等の欲求を充たさんとする數百の競争者があつた場合に

は、商品價值規制のかゝる法則（筆者註、需給法則）はあり得ないのである。予が想像した様なかゝる市場では、或者は鐵の用途を知つてその一封に對して金一封を提供せんとするかも知れない、併し、自由競争が支配する場合には、彼はその様な價值を鐵に與へるやうなことはあり得ない、何故かといふに、鐵は必ずその生産費に迄下落するであらうから、そして生産費は凡ゆる市場價格がその周りを旋廻するところの中心點であるから¹⁾と言つてゐる。尙リカアドオは一八二〇年十月十日附マルサス宛書翰の中でこの點に關し次ぎの様にも述べてゐる。「貴下は需要供給が價值を規制するといふが、予はそれは何等の意味をもなさぬと考へる者である、……價值を規制するものは供給であり、供給そのものは比較的生産費によつて統制せられるのである。貨幣で表はされた生産費は労働の價值と並びに利潤とを意味する。今、假りに、予の貨物と貴下の貨物と同價値なりとせば、その生産費は同一でなくてはならぬ。」然りとすれば、相對價值變動の原因はたゞ一つである、「その一つは影響の微弱なものであつてそれは賃銀の騰落——予の考を以てすれば同じことであるが——利潤の騰落である、他の非常に重要なものは商品生産に要する労働量の多少である²⁾」と。斯くて、リカアドオは競争品に關する限りマルサス説を斥けて自説を固持するのである。

尙、彼はマルサスの供給の條件としての必要價格に對して次ぎの如くに批判する。「彼は、一商品の自然價格はその商品の供給に對する需要の關係に依存するといふ言葉を以つて始めたのである——而してこれは予の反對する主張である。然るに、今や彼は一商品の自然價格はその生産に必要な要具の需要供給に依存するとい

1) Notes on Malthus. p. 8.

2) Letters of D. Ricardo to T. R. Malthus 1810—1823. Ed. by T. Bonar. 1887. p. 176.

ふのである……。予はこの二つの主張の間の本質的相違を指摘するを以てこゝでは満足しやう——事實に於て後者の主張は「商品¹⁾の自然價格が上騰若しくは下落するのはその生産費が上下するからである」といふことに他ならぬのである¹⁾と。換言すれば、マルサスが一方に於て自然價格も含めて凡ゆる價格が需給によつて決定せられると言ひ乍ら、他方に於て必要價格はその生産に要する勞銀、利潤、地代によつて構成されると主張するのは矛盾である、とリカアドオは指摘するのである。

以上がマルサスの主張と之に對するリカアドオの批判の主要點である。要するに、マルサスは、獨占價格や市場價格のみならず自然價格——價值までも需要供給の濃度關係によつて決定せられかつそれによつて變動する、而して生産費は供給の條件として需給關係に影響する限りに於てのみ價值、價格を變動せしむるに過ぎないと主張する。之に對して、リカアドオは獨占價格や一時的市場價格はこの法則によつて説明せらるゝも、自由競争の下に在る任意可増の商品には適用することが出来ない、これらの商品の價格は結局生産費によつて決定せられるといふのである。

この點に關しては、吾々はマルサスと共に現實の價格決定に際しては需給關係が主たる事情をなすといふことは認めなければならぬ。リカアドオは盛んに需給學說を攻撃し斯學上多大の誤謬は此に發すると言つてゐるのであるが、彼自身の所論と雖も需給學說を應用することなしには成立しないのである。彼は貨物の價值は投下労働量に比例するといふのであるが、然らばそれは如何なる過程を経てあるかと問ふならば、若し價值と

1) Notes on Malthus. p. 22.

投下労働量との間に不一致が生じたならば比較的不利なる商品への労働の投下者従つてその商品の供給が減じ比較的有利な商品への労働の投下者従つてその商品の供給が増加し、斯くて労働費用に應ずる様な需給關係が成立することによつてとあると答ふるより外はないのである。現にこのことは彼自から告白してゐるのである。『予は一商品の價值は附加的供給を俟たずして常にその自然價格に一致するであらうといふのではない、生産費は供給を規制するが故に價格を規制するといふのである』¹⁾と。故に、リカードオの立場よりするも需給供給學說を誤りだとは云ふことが出来ないのである。すべて價格を支配するところの直前の事情は需給關係であるといつて一向差支へないのである。

併し乍ら、かゝる表面的な立言丈けでは經濟價值論は満足することは出来ない。更に進んで、需給關係そのものは如何なる原因によつて決定せられ變動するやを明かにしなければならぬ。この點に關して、マルサスはそれは單なる需供給の數量ではなくその濃度の大小であるといふ。併し乍ら、かゝる提言によつては未だ少しも問題は進展せしめられてはゐない、こゝでの問題は何時、如何なる原因によつてその濃度が變動するかといふことに在る。リカードオは、この點について、任意可増の財貨に於ては労働費用に比例するやうな價值關係が實現するまで需供給の關係が變動するといふのである、換言すれば、需供給の根底にあつて價值を終局的に決定するものは生産費であるといふのである。この意味に於てリカードオの價值論は確かにマルサスに比して一步深く現象の本質を突込んでゐるのである。

1) Notes on Malthus. p. 21

されば、需要供給説と生産費説とは、彼等の考へた様に、氷炭相容れぬものではない。前者は價值決定の實際的、表面的、直前の事情であり、後者はその原理的、内部的、根本的事情である。兩者は互に合して價值の完全な説明となるのである。然るに、實證的なマルサスはその表面的事情にのみ囚はれて深く根底に横はるものを探らうとはしなかつた、之に反し、純理を好むリカアドオは原理を重んずるの餘り現實の事情を輕視したのである。

四、價值尺度に關する論争

マルサスとリカアドオとの間の價值論争の第二のテーマは價值尺度に關するそれであつた。マルサスが當初は穀物と労働との平均を以て、後には支配労働を以て價值の尺度なりと主張したるに對し、リカアドオは至つて消極的態度をとり、嚴格な意味の價值尺度は見出し得ないが、投下労働はマルサスの提案に比べるならば遙かに妥當な價值尺度に近いと論じたのである。

即ち、マルサスはその Principles 第一版の中で穀物と労働との平均が價值の尺度に適することを次ぎの如くに論證する。一定の品質を有つた一定量の穀物が支配する労働量、従つてまたその支配する諸商品の量は時によつて非常に相違する、又一日の通常労働が支配するところの穀物量・主たる生活必需品の量も亦時によつて相違する、故に之等は何れも單獨には精確な價值の尺度たることは出來ない¹⁾。併し、吾人は兩者を結合するこ

1) Malthus, Principles. 1820. pp. 126—128.

とによつてヨリ精確なものに達することが出来る。といふのは、「労働に比して穀物が高いときには當然穀物に比して労働が安くなければならぬ。一定量の穀物が生活必需品、便宜品、享樂品の最大量を支配するであらうときには、常に一定量の労働はかゝる事物の最少量を支配するであらう、又穀物が最少量を支配するときは労働はそれらの最大量を支配するであらう。されば、若し吾人にして兩者の平均をとるならば、明かに何れの變動も反對の方向への變動によつて訂正されることの尺度をもつことになるであらう、そしてそれは單獨の場合よりも遙かに同量に近い生活必需品、便宜品、享樂品を代表するのである……」¹⁾と。

このマルサスの奇妙な論證に對してリカアドオは駁して曰く、「この議論全體に一の完全なる錯誤が含まれてゐるやうに私は思ふ。……果して穀物と労働とは異なる方向に變化してゐるであらうか。穀物が労働に對する相對價値に於て騰貴するとき、労働は穀物に對する相對價値に於て下落する、而してこのことを呼んで異なる方向への變化だといふのである。織物が價格に於て騰貴するとき、それは金に比較して騰貴するのである、そして金は織物に比較して下落するのである、併し乍ら、このことは、それらが異なる方向へ變化するといふことを證明してはゐない、何となれば、同時に金は鐵、帽子、革等々織物以外の如何なる商品に比しても騰貴したかも知れないからである。……労働者にとつて非常に重要な消費物たる穀物が騰貴するにつれて、穀物の程度に於てはではないが、労働も亦騰貴する。即ち、穀物が二〇パーセント騰貴するならば、労働は多分一〇パーセント騰貴するであらう。これらの事情の下では、穀物で評價されたる労働は下落したやうに見え、労働で

1) Malthus, Principles. 1820. p. 128—129.

評價されたる穀物は騰貴したやうに見える。併し、これ等は共に——その程度は異なるが——騰貴したることが明白である、何となれば、これ等は他の總ての貨物で評價されるならば、ヨリ大なる價值を有つてゐるであらうから。されば、明白に可變的なる二貨物の平均がとられてゐるわけであり、而かも一方の變化は他方の變化の結果を匡正するといふ原理にもとづいてなされてゐるのであるが、——併し、私はこれ等のものが同一方向に變化することを證明した、故に私はマルサス君がかくの如く不完全なる且つかくの如く可變的なる標準を拋棄するの得策なるを解せんことを希望する、¹⁾』と。

この點に就てのリカアドオの批評は實に無條件に肯定せらる可きである。

それでは、リカアドオ自身はこの問題についてどんな考へを持つてゐたであらうか。彼は Principles 第三版（一八二二年）第一章第六節『不變の價值の尺度に就いて』の中で、諸貨物の相對價值が變動した場合何れの眞實價值が變動したかを知るために、それ自身の價值の不變なる尺度を有することは望ましいことではあるが、現實にかゝる尺度を見出すことは出来ないといふ。その理由は、彼によれば、一『其生産に要する労働の増減せぬといふものはないから、』二『その生産と……他の諸貨物の生産とに要せらる可き固定資本の割合の異なるが爲め、』三『固定資本の耐久の程度の異なるが爲め、』そして四『該一貨物を市場に齎す爲めに要せらるゝ時間は……他の諸貨物を市場に齎す爲めの時間に比して長短があるかも知れぬから』等である。²⁾斯くてリカアドオは精確に不變的な價值の尺度が現實に存在することは否定するのであるが、彼は投下労働量は不完

1) Notes on Malthus. pp. 40—41.

2) 小泉信三譯、(經濟學古典叢書) 五七—六三頁

全乍らも尙比較的理想に近き價值尺度なりと考へるのである。

其の後、マルサスは穀物労働平均説の支持し難きを悟るや、一八一三年 “The Measure of Value stated and illustrated, with an Application of it to the Alterations in the Value of the English Currency since 1790.” に於て今度は價值の尺度は支配労働に在りと説を改めるに至つたのである。こゝでの彼によれば、若しも貨物の生産に労働のみが用ひられるものとすれば、その價值が投下労働量によつて測定されるといふことは誤ではないが、貨物の生産に資本が用ひられる場合には資本に對して利潤が支拂はれなければならぬから、貨物の價值は労働と利潤とから成立するやうになる。而して、『労働及び利潤にのみ分解するところの商品の交換價值は、正確に、實際にこの商品の生産につき込まれた蓄積労働並びに直接労働に、總前拂に對する不定の利潤額を労働に見積つた額を加へた和からなるところの労働量によつて測定せられる。けれども、この労働量は、必然的に、商品が支配し得るところの労働量と同一である¹⁾』而かも、各人の労働の價值は恒に同一なるが故に、²⁾支配労働こそ眞實の價值の尺度である。

この種の提案もまた、リカードは主として二つの理由から之を斥けたのである。その一は、支配労働は物の尺度に不可欠なるそれ自體の不變性といふ要件を備へてゐない、といふことである。曰く『今假りに疫病の爲めに吾が人口の四分の一が奪はれたとせよ、然るときは、労働は總ゆる商品に比して騰貴するであらう——然るにマルサスは、労働の供給以外には何事も生じないにも拘らず、之を諸商品の價值の下落と呼ばんとする

1) The Measure of Value. 1823. pp. 15—16.

2) Ibid., p. 32.

のである。」¹⁾と。他の一つの理由は、支配労働量を以て価値の尺度とすれば、利潤及び価値なる慣用概念に矛盾する歸結が生ずるといふのである。曰く「例へば一農業者が……百クオーターの小麦……を得たと假定したならば、次年の労働の價格が配のために使用しその結果として一一〇クオーターの小麦……を得たと假定したならば、次年の労働の價格が如何程であらうとも、彼の利潤は一〇パーセントではないであらうか。もし一一〇クオーターにして以前の百クオーターが支配した以上の労働を支配しないならば、貴下によれば、農家は何等の利潤も得なかつたことになるであらう。」²⁾「二國があつてその國民の勤勉及び熟練の程度は同一なるも、其一方は安い食料・馬鈴薯を、他方は高い食料・小麦を常食とするとすれば、利潤は一方の國に於て他方の國よりも高いといふことは貴下も認めるであらう。……假りに一人があつて百磅の費用を要し小麦國で百拾磅で賣らるべき葡萄酒一樽を馬鈴薯國から輸出したりとすれば、貴下はたゞ單に一層多量の労働を支配したりといふ理由を以て、葡萄酒は輸出國に於て高價なりといふであらう。……しかし凡ての人々は葡萄酒は馬鈴薯國に於けるよりも小麦國に於て高いといふのである……」³⁾と。

斯くて、マルサスの支配労働即價值尺度論に對し、リカアドオは頻りにその確立の困難なることを説いたのである。そして、彼は死に先だつ約一ヶ月マルサスに宛てた書面に於て「予の貴下に對する不平は、貴下が吾人に精確なる價值尺度を與へたりと主張することに在る。予はこの權利主張に反對する。予は成就し、貴下は失敗せりといふのではなく、貴下も予も共に失敗せること、而して人の爲し得るところは、大多數の場合に適

- 1) Letters to Malthus. p. 210.
- 2) Letters to Malthus. p. 234.
- 3) Letters to Malthus. p. 216.

用し得可く、多くの場合に於て甚しく精確より離れることなき價值尺度を發見するを以て盡くすることは是れである。予の自から得たりと嘗て揚言し、今現に揚言するところは是を以て盡きる。貴下にして之よりも大なる權利を主張することなからんか、予は二層謙遜であらう。たゞ予は貴下がその志せる大目的を成就したりと揚言するのを容認し得ないのである、¹⁾と書き送つてゐるのである。斯くて、兩者の意見は遂に一致せざるにリカアドオは一八二三年九月廿一日病魔の爲めに斃れたのである。

今この點に關する兩者の所論を批判するに當つて吾々は問題を二つに分つて觀察しなければならぬ。一は一定の時一定の場所に於て諸財の價值の大きさは何を基準として知り得るかといふことであり、他はかゝる基準が不變的に現實に具體化されて存在するかどうかといふことである、前者は純粹に理論的な問題であつてそれはまた價值本質論と密接な關聯を有する、之に反し後者は實際的な應用的な問題である。

後の問題に關する限り、私はリカアドオの否定的態度に組みする者である、何となれば、諸財の價值の大きを示す基準が假令支配勞働量であるにせよ投下勞働量であるにもせよ、各時期各場所を通じてこれ等の勞働量と一定不變の關係に在るやうな事物は現實に世の中には存在しないからである。併し乍ら、マルサス對リカアドオの價值尺度に關する論争はかゝる問題として見る限り學問的意義は少いのであつて、前者の問題として解してのみ、即ち價值本質論に關聯せしめてのみ學問的興味があるのである。

然らば、この點についてはどうであらうか。リカアドオは商品と商品とが一定の割合で交換されるのはそれ

1) Letters to Malthus. p. 237.

らに投ぜられた労働量が等しいからである、従つて投下労働量をその価値測定基準とすることが出来ると思へるのである、併しこの立場を忠實に守る限り利潤の存在を、即ち資本と生きた労働との交換の際に於ける不平等労働の交換の事實を説明することは出来ないのである。こゝに著目したマルサスは、即ち資本と労働との交換に於ける不平等労働間の交換事實を見たマルサスは、こゝに支配労働量を以て価値の大きさを示す基準なりと主張し商品と商品との間の交換に於ても不平等労働の交換が行はれるものと考へたのである。併し乍ら、利潤の存在を基礎付けんが爲めに提案されたこのマルサスの支配労働説は之を一步立ち入つて分析するならば却つて利潤を否定するといふ皮肉な結果を齎らすのである。何となれば、マルサスは商品はそれに投下されたより以上の労働量の産物と交換せられることによつて利潤が生ずるといふのであるが、人は賣手であると同時に買手であり、賣手の數だけ買手があるが故に賣手の利得するところのものは買手の失ふところとなり、一般に利潤存在の餘地がなくなるのである。斯くて、リカードもマルサスも共に問題を眞に解決してはゐないのである。この問題に對する一つの回答は後にマルクスによつて、同じく投下労働説の立場から與へられてゐる。即ち彼は労働力は一ヶ特殊の商品であつて生産的に消費されることによつてそれ自身の価値よりもヨリ多くの価値を生み得る、従つて諸商品は純粹労働価値法則に従つて交換されても尙利潤は成立し得るといふのである。この答案の可否を検するのはこゝに直接の問題ではない、たゞ彼によつて一つの試みがなされてゐるといふことを指摘するだけに止めよう。

五、結 語

扱て以上によつて、私はマルサス對リカアドオの價值論争の要點を略述しかつ批判し終へた。之を要するに、經驗を常に學說の最後の審判と看做すところのマルサスに在つては、そこに打ち建てられた諸理論は確かに廣汎な妥當範圍を有つてはゐるが、反面それらは深刻さに於て、統一性に於て缺くるところが多かつたのである。彼の需要供給説といひ支配勞働説といひそれは事實そのものゝ解説に近くたゞ常識を一步理論化したものであつて、價格現象の根底に横はるものに充分觸れてゐるとは云ふことが出来ないのである。又本質論に於ける需要供給説と尺度論に於ける支配勞働説とが果して矛盾なく結合し得るや否やも一つの問題である。然るに、抽象の世界に基づいて經濟諸法則を組立てたところのリカアドオに於ては、そこに論理の一貫は存したかその歸結は餘りに現實の世界から懸け離れてしまつたのである。従つて、彼の投下勞働説は本質論としても尺度論としても數多くの例外を認めざるを得ざるに至つたのである。

斯くて、この價值論争によつて吾々は内容的に諸問題の存在を知る許りではなく、又良く兩雄間の學問研究上の對蹠的な態度をも窺ふことが出来るのである。